（第二百二十八號）
明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
大正三年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）

◀緊急廣告▶

▲混亂せる現代思想に最高指針を與ふるものは法華經也
▲法華經は健全なる第三文明を產み出すべき大なる力也
▲文明人は最高の思想に接觸するを要す。吾人は文明人にして法華經は最高の思想也。然らは則ち文明人たる吾人は本書を讀まざる可らず

文學博士　三宅雄次郎君序
大僧正　本多日生師著

法華經講義

特價金三圓
郵稅十六錢

▲文明人の誇りは財にあらず金にあらず。洗練せる思想と高潔なる人格を具ふるに在り。須らく第一の重寶として本書を備へよ
▲本書の再版將に賣切れんとす。此機を逸して千歲悔ゆる勿れ

發行所　東京淺草北清島町（振替東京一二一九）　統一團

大正三年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第二百二十九號

統一

大哉日蓮主義　大僧正　本多日生

教育と宗教　法學博士　山田三良

開結二經の研究（三）　井村日咸

日蓮主義と名士　記者

爾の精神に靈火を點ぜよ　三上義徹

▲スエズより通信
▲北海道巡教
▲各地教報

◀信行の士女に虔告す▶

日蓮主義大法會大講演會

▲會期――四月十一日より十三日に至る三日間

▲會場――京都市寺町二條妙滿寺

▲法要――大僧正本多日生師並全國僧員數十名登山、毎日午前九時午後一時兩度勤修

▲講演――毎日午後七時、立正安國の本義を發揚す

▲待遇――何派と云ふ教團の所屬なぞは問ふ處でない。苟も日蓮主義者としての道念ある士女の參詣は。大に喜んで便宜を計る。無味なる旅宿と違つた信仰の溫かみある宿泊所を山内に設けてある。全國の信仰家が泊つて居るから互に膝を交へて信仰生活を語り合ふことが出來る。

爾の精神に靈火を點ぜよ

近世に於ける科學の精神は、唯物主義個人主義社會本位主義を生み出だして、在來の宗教道德其他の思想を根底より破壞せんと企てたのであるが、而かもそれ等の内には既に唯心論的傾向を包藏して、自己の内部生命の絶對價値を認めつゝ、その主觀的色彩が一段濃やかにならうとして居つたのは事實である、さしも萬能を誇つて居つた科學の智識にも竟には限界があつて、物心關係の究竟的説明に窮することになつたので、自身の内に破産の運命を宿して居つたことを自覺するやうになつた、さればこの行き詰つた不調和の思想が、痛く民心に迫り來りて懐疑と煩悶を起さしむるに至り、官能の世界に對する反動として、生命問題の潮流は澎湃として一世に浸み渡つて來るやうになつた、こゝに於てか結歸の中心は同樣ではないけれども、信賴と崇拜との念は、自づから宗教的欲求に到達したのであつて、人間自身の内部性に一靈火の點ぜられたものと見ることが出來る、けれどもこの宗教的欲求が單に主觀生命の絶待を認む

るのみであつて、偉大なる客觀の實在を承認し得ることが出來ないならば、そはいまだ內部生活の究竟に進まざるものである、およそ宗教とは、人に神性ありてうだけの哲學的理具論ではない、それは唯心的必然關係であつて、宗教成立の基礎として尊重すべきも宗教の全部でない、宗教は其本質として救濟である、即ち全自己と偉大なる實在人格との精神的關係である、さうしてその救濟とは消極的意義ではない、吾人が精神的靈火により唯物的束縛を燒き盡して之を超越し、實在の人格を憧憬しその愛護をうけつゝ、永久不滅の生活をおくらんとする精神の躍進である、積極的に生命展開の實驗である、さは云へ純主觀主義でないことは言ふまでもない、日蓮主義の特色は理智悲具有の實在本佛に慕ひあこがるゝのであつて、この精神に渴仰の靈火を點じて躍進する所、そこに溫かき精神的接觸を存し、感應的實驗生活を營み得らるゝので、日蓮上人の一代に於ける生存活動は、まさしくこの關係を立證して餘りありと云ふべく、靈火に輝ける上人自身の告白に聽かば

『日蓮流罪に當れば教主釋尊衣を以て之を覆ひ給はんか、去ぬる年九月十二日の夜中には虎口を脫れたるか、必ず心の固きに假て神の守り則ち强し等は是れなり、努々疑ふこと勿れ

げに力强き確信ではないか、上人が本佛の實在を渴仰し躍進する所、迫害多難なりしも悠々乎として生を樂しみ、久遠本化の靈火は一切の煩惱惡魔を燒き盡さんとした、

誠に尊とい運動ではないか、

彼の基督教の『神は形なくして在まさゞるなし』との思想の如き、唯心的實在であつて、吾人の活ける精神に渴仰の念を浮ぶることが出來ない、或は眞言や禪のやうに主觀生命の絕對に囚はれて居つては、宗教及人生を語るべき資格が無い、さりとて念佛門徒の如く人生の生甲斐なさを悲んで、之を振り捨てゝ客觀の力にのみ賴らんとするは、自由の生命を蔑みする思想でばなからうか、純他力は人自身の意氣を沮喪せしむるが、純自力は邁進の根礎を缺く、是等は調整せる思想でない、いまや思想混亂をきはめて歸趣なきの時、まづ爾ぢ自身の精神に拆伏を行つて靈火を點じ、確實に反省と自信との力を求め、さうして不斷の發展進行に躍動せねばならぬ、日蓮上人がその肉身を顧みては

『日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出てたり』

と言つて、肉の方面には物の數ならぬと謙讓し反省して居るけれども、轉じて精神生活を披瀝しては

『心は法華經と信ずるが故に梵天帝釋をも猶ほ恐れと思はず』

あゝ何たる强烈の自信力であらう、かゝる强大なる自信の力、それが活動の源泉となつて新人生は開拓せらるゝ、徒らに世の運命に翻弄せられて悶え苦しむもの、日蓮上人の智水を汲んで久遠の生命に復活せよ

大哉日蓮主義

大僧正　本多日生

近年思想文明の進歩に伴ひ、時代の風潮を指導すべき權威ある宗教は、日蓮主義の特長であることが發揮せらるゝ樣になつて來たのであるが、實は此の主義は今を去る七百年前日蓮上人によりて唱導せられ、爾來歴然として我國に存在し來りたる主義であります、日蓮上人は世人の評論するが如き尋常一樣の偉人ではない、深く大和敷島の道を究めて大に國民性を發揮したる國士である、上人の父は

▲鎌倉の暴狀を憤つて房州に隱遁せし武士であり上人は其血を受けて居らるゝからその性格が影響を與へて居るのである、又上人は儒教を敎育せられ、唐の太宗皇帝が當時の宰相賢人等を集めて、政治道德經濟を論議せし貞觀政要を座右に備へ、之を愛讀せしのみならず其全部を御寫しになつて居る此の一例をもつても餘程儒教を敬重し其影響を受けて居らるゝことは明かであります、更に佛敎については叡山に於て十二年間勉學せられた、最初

▲志を立つるに際し、二十一日間至誠を籠めて虛空藏菩薩に、『日本第一の智者となし給へ』と祈られたが、精神凝て血を吐かれたと云ふ位て、道のため國のためと云ふ崇高なる道義心に導かれて、其智慧を磨く爲に熱誠の餘り吐血すると云ふは容易ならぬ事て、日本の歴史に世界の歴史に一人もありません、而して學問の淵叢である叡山に十二年間勉學せられたのてありますが、それも普通の讀書てはない論議と云つて嚴格なる論式がある、主論者一敵論者と

に分れて主論者が說を出せば敵論者が之を反駁し、互に反覆辯難するのてある、さうして道理文證現證遮難の格式によつて論議し、更に證義者が之を批判するのてある、上人は斯かる嚴格なる方式によつて十二年間儒教の敎義を鍛錬せられたのてあつて、其間に重要なる問題を熱心に研究し盡されて居ります、尙ほ此の

▲遊學中に三井寺に行き、南都高野等を歷訪し、又惟神道を吉田兼益に探り、儒教を大學三郎に學び、其他和歌の道圍碁書道等を習はれたのてある、かくて伊勢の大廟に參拜して一百日間祈願を凝らし、夫れより清澄山に歸りて始めて旗上をせられたのてあります、故に日蓮主義は單に法華經の思想のみてはない、試練十有二年、一切の諸說を網羅し包容したる上に、中心を與へ統一を與ふるにあるのて、日蓮主義又は統一主義と稱すべく、日蓮主義の尊高にして偉大なるは實に此點に存するのてある、統一主義とは色々の主義思想の特色を尊重しつゝ、それ以上の尊とき意義に纏めることてある、統一主義と歸一主義とは略ぼ似寄りたる邊もありますけれども、聊か相異なる點があるので、歸一主義とは他を排して一に歸するやうにも見へ、統一は各種各樣の本質を失はずして其の總てを包容するの意てありまして、例へば軍隊て申せば、步騎砲工各異りたる敎練の下に養はるゝも、軍全體の目的に向つては、軍閥の命令の下に各特色を發揮しつゝ、統一的の共同運動を要するが如く、更に大元帥陛下の御指揮の下には陸海軍人は勿論、政治家も國民も總て經濟上の關係に至るまて、老幼男女を問はず國の目的を達する爲各人の特色を發揮しつゝ、統一の行動を取るが如きは實に統一主義の好表現てあります、而して統一主義を全くするには二個の要件がある、卽ち開顯と折伏とてあります

▲開顯主義とは、一の尊い理想の下には低いものは服從せねばならない、その間を疏通するのが開顯主義てある、開顯とは開は開發とか開會とか解釋せられて、今迄隱れて居るものを顯はして來るのは開發て、隔てられて居るものを恰も座敷の襖を

撤廢して疏通融會する如きは開會である、それから顯とは顯示とも顯說とも云ふので、捲ひ隱されてあるものを顯はし示し、根本とか本體とかを顯はす意味であります、此の開顯に依り統一の理想を完ふせんとするのである

▲折伏主義とは、統一の理想に背き反對せんとする族があれば、之を折いて降伏せしむるのが折伏主義である、卽ち個人主義などの思想に囚はれて、忠君愛國は野蠻の思想であると云ふ者があれば、斯る輩はいくら開顯し融會せんとしても駄目である故に、之を痛擊するの手段に出てねばならぬ、是れ日蓮主義の折伏ある所以であります、折伏と云へば單に破壞的に感ずる人があるかも知れぬが、決して破壞てない、或る程度迄痛棒を加へ、遂に納得せしめて軍門に伏せしめ、忠良なる歸依者となすを目的とするのである、故に破折し屈伏せしむるのである、伏の字に注意を拂はねばならぬ

斯の如き開顯と折伏とは統一主義の重要なる二方面であつて、左右の兩翼とも云ふべきである、而して開顯統一の理想は、其基く所は

▲法華經に存して居るのであります、法華經は釋迦牟尼が一代五十餘年間に說き去り說き來りし幾多の經典を結束すべく起つて居るのであります、法華經の序論に無量義經と云ふ御經がある、其中の文に『無量義ハ者從二一法一生ズ』とありまして、樣々の限りなき意義を說明し來りしを統一すべく法華經は起つたのであり、而して妙法なる一語の中に一切を含蓄して居るのである、故に含蓄的なる妙法の一語を說明すれば、そこに凡ての佛法は存するのであります、又法華經には『開ニ方便ノ門一示ニ眞實ノ相一』とある、方便と云ふ言葉は尊い言葉で之に三種の解釋がある

(一)方便とは法用である、水が方圓の器に從ふが如く適用と云ふ意義であります

(二)方便とは能通である、向ふに當てがうやうな適合の意義は未だ尊いものでない、其處を通りて其處に止まらずに、更に上の方へ進むと云ふことが能通である

三(方便とは秘妙である、之は尤も方便の眞意義を現はすものであり、方便の如き有樣に現はるゝものが其僞に眞實であると云ふことであります、換言すれば方法卽ち目的なりと云ふのが秘妙の意義であります

この事は單に釋迦牟尼が說かれたることにのみ止まらず、社會に現はるゝ一時的に見れる事と永久的に存することゝの接觸を計り、往いては有爲無常に見ゆる人生に常住不滅の眞理ありと主張するのであります、法華經に『是ノ法住ニ法位一世間ノ相常住』とあつて、法華經そのものが開顯と云ふことを理想して居るのであり此點に就ては古來一人の異存もありません、而して此の法華經の開顯統一の思想は、日蓮上人によりて最も整頓して發揮せられたのであります、現代は小さな主義が群出して互に軋轢せる時代であるから、大なる理想を以て全體を引括る必要を切實に感ずるので、そこに日蓮主義發揮の必要を認むるのである、而して現代に於て尤も注意を拂ふべき問題は

▲靈と肉との調和に在る、時代は生活問題を尊重する樣になつたが、未だ其方式に就て明瞭なる解決を得て居らない、或は現實主義を主張して利益權利等を生活の中心に置き、或は精神生活を叫んで精神上の希望に生きんとして居る、彼の西洋における中世紀の文明は、精神問題を尊重して現實を輕じ、其反動として近世文明は金錢肉欲に飽かんことを切望し、更に其弊害に對して最近の思想に於ては、中世紀の思想を復活して、金錢法律等を尊重しつゝ、そこに崇高なる道義信仰を喚起せんとして居る云ひ換ゆれば靈と肉とを調和したる文明を建設せんとするのが、現今の健全なる思潮であります、我國に於ても德川時代は精神同題を尊重しつゝ、肉体より起る慾望を輕んずる傾向が强かつた、維新後は西洋文明にかぶれて實利主義に走り、殊に實業社會には理想を迂遠なりと考ふる者が多いのである、然るに日蓮上人は現實と理想との融合、靈と肉とを調和すべく主張せられたのでありまして、當時の宗教家が現實を輕んじ超

國家主義を唱ふるものが多かつたのに對し、上人は

極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず

と述べられて、特に淨土門が理想を未來に置く傾向ありしに對して痛擊を加へられたのてあります、卽ち淨土門の如く何にも煩さい事のない所で、氣樂に百年修行すればとて何等の功德もない、此の煩累多き現實の世に踏み止まつて、奮鬪し修行するのが尊いのてあつて、徒らに高遠なる理想に馳せて現實を超越せんとする傾きあるは、華嚴宗眞言宗等は其著るしきものてあります上人は是等の思想に對し批判の斷を與へ、凡て敎は人間本位なるべく、人間に接觸を取らざるものは如何に高遠なる敎てあつても價直が無い、釋迦牟尼が人類の中に降誕せられし所に尊とい意義があるのてある、この思想は上人十八歳の時明白に示されて居りますので、印度に起つた佛敎其まゝてない、又上人は

谷の池を不淨なりと嫌はゞ蓮を取るべからず

と仰せられて居るが、蓮の根は泥中にあつて而して水面にのびて美しき花を開き、淸き香を放つのてある、人生を輕視するは誤りてあるは言ふまてもなく、又現實に沒頭して仕舞うのも取るべきてない、其何れにも偏すべきてない事を敎へて居るのてある、釋迦牟尼もやはり現未融合の上よりこの思想を現はして

▲蓮を愛し

法華經を說き終つて後、涅槃經に於て人生濁濁の中にありては、この泥土の如き人生を尊重し啓發せんとしたのてあります、涅槃經には

我世と爭はず世のために汚されざる事蓮の如し

とありまして、如何に濁濁せる人生を淨化せんと努め給ふかを知るに足る

さらに進んてこの思想を諸種の方面に應用し、高遠なる法華の理想と世間の現實との調和を計つて行くのてある、この事は最も尊とき理想てある、之を除き去らば或は佛敎の價直の大部分は失はるゝてあらう、法華經には、人道聖賢の道世俗の道德、或は政治法律農工商の生活を資くる一切の事、悉く法華の正法と一致し順應し調節して進むものなりと敎ゆるのて、この

法華の崇高なる理想を以て照らすが故に

▲現實の世法

が明かになるのてある、「天晴地明」とは卽ちこの意義を發揮したものてある、

御宮仕を法華經と思召せ

とは法華の理想を言ひ表はしたものてあります、生ける法華經は宮仕の職分の上に發動するのて、淸き高き理想信仰に生きて煩累多き職分を愉快の中に全うし得るのてある、生活上の問題の高遠なる信仰との調和を調へられて居る、信仰と實生活とを調和し法悅の生活を送ることを得る、而して上人は斯から理想を口先計りて唱道されたのてはない、實際に之を身に行はれたのてあります、故に上人の一生涯を見るに、決して信仰三昧に這入つて居られない、一種の日蓮的生活とも稱すべき方式てあつて、常に實世間に立ちながら、信仰の力を以て艱苦缺乏に打克ちつゝ活動し奮鬪せられたのてあります、而して信仰に偏して智識を輕視したものてない、多くの宗敎家は信仰の一面に走り、又敎育家は單に智識の一面に偏して、智識と信仰との關係は、現今日本の思想界にては未了の問題てある、兩者が其分域目的を異にすとの意に考へらるゝが、未だ共に根本義に徹底せざる說てある、彼の基督敎に於ては智識を輕んじ、哲學の多くは信仰を蔑視する、多くの宗敎は信仰に偏して居る、現代文明は智識に偏する傾きがある兩者何れも不具者となつて居る、然るに法華經を見ると、方便品に於て完全なる哲學的基礎を築き、更に壽量品に入つて宗敎の本旨を建設せられて居る、又

▲歷史的

に之を見れば、天臺妙樂傳敎等が眞理の基礎の上に立ちて一念三千論を主張せられ、日蓮上人に至つてその系統をうけ、この基礎の上に人格實在の佛陀を敎へられたのてあります、斯かる上人より日蓮主義を考察すると、上人は頗る智識を尊重しつゝ信仰との統一を理想せられて居る、元來佛敎に於ては智識の總計を般若とも種智とも稱し、或は一切種智とも說くのてある、一切種智とは一つのものから

發生して其結論がまた一つになるのである、上人はこのことを盛んに主張して智識の統一を論じて居らるゝ而して法華經には之を一乘法又は一乘教と云ふのであるが、立正安國論にこの意義を明かにして

早く信仰の寸心を改めて速に實乘の一善に歸せよ

とある、一善とは智識の統一は無論のことで、一切の法門は悉く一の妙法より發し、又一の妙法に歸すると主張するのである、又信仰問題に就て、嚴格に本尊觀の統一を圖り、基督教の如く一神主義でない、基督教の如く獨一眞神を主張する時は、神と吾人の二元を認むる事となり、一神を尊崇するの餘り我國の皇祖皇宗をも神として尊敬することが出來ぬことゝなる、又汎神教は哲學的眞理としては尊いけれども、多神散漫の弊は恐るべき影響がある、斯の如く一神教は狹隘に流れ、汎神教は散漫に走るの弊がある、日蓮上人は一神多神の兩方面の弊害を捨てゝ、其の長所を調節せられて居る、即ち諸法實相論に於て汎神の主義を說明し、哲學的に其根抵的整束を試み、更に進んで壽量品に

▲久遠の本佛を光顯して法佛を統一し、恰かも太陽が出てゝ總ての光を統一し、他の光を滅却せずして一大光明に攝收する如く、統一神教を顯現せられたのである、之を天の一月影を萬水に浮ぶるに譬へられて居る、世界に宗教多く流派三百幾十を數ふるも、斯の如き整然たる組織の下に統一神教を開顯せられたるは、獨り日蓮上人あるのみてあります、あゝ大なる哉日蓮主義、日蓮主義は現代の思想界に嚮して居る一切の主義に對して、堅實なる中心を與ふるものであつて、而して之を包容し調節し統一するものであります、故に個人の不斷の向上も、國家の理想を實現する上にも、世界の平和文明を保全する上にも、健全なる日蓮主義の思想の啓導に依らねばならぬと信ずるのであります

宗教と教育

法學博士　山田三郎

我國に於ては教育制度實施以來、國内に普及して人生社會を啓導して居ることは慶すべき事實である、國民が無學文盲にならない樣に、政府が之を監督して居るのは文明の餘澤である、而して教育は教育の發端よりして、宗教と別物なりとする主義である、學校教育は宗教より獨立して居るので、之が我國教育の大方針であります、故に教育家は宗教を無用視して居る、大學の先生でありましても、宗教を信せず信仰を持たぬと云ふのが偽らざる心持であるとおもふ、從て大學以下の學校の職員は、信仰に遠ざかつて居るのが名譽であると云ふ有樣である、而してこゝに第一に起ります

のは、學校が宗教より離れて居るのが可なるや否やと云ふ問題である、而し之を決定するには宗教を見なければならぬ、少なくとも現在の各宗を批判して眞偽を決論せねばならぬとおもふが、今日の各宗教は偽りなる宗教である、其本來の責任を盡さゞるものが凡てゞある、一方に教育者が排斥するのは大なる理由を存する、宗教を教育に入れないと云ふのは正當なりと認めざるを得ない、學校には宗教を入るゝことを許さないが、一宗派の主義を入るべきでない、學校として課程に課するのは不可である、眞の宗教が普及するまでは現在の制度を維持する必要がある、現在の宗教其まゝを課程に入るべきものでない、而しながら教育者の考にして、宗教は愚人の信ずるものであると云ふ態度は根本より間違である

▲教育の目的は人格の修養

にある、完全なる人間は智識のみては鍛え上げられない、學校に於て教科書のみに依て、完全なる人間を製造し得られやうか、如何なる學者が何年間かゝつても人間を製造することは出來ぬ、單純なる學校教育だけでは不可能である、教育者が教育のみに依つて人間を作れると思ふは誤りであるが、我國の教育家に斯かる態度がありはせぬか、若しそれ等の意見を持つて居るならば間違てある、人の智識は偉大であつても、今日の哲學は人智の最上なるものである、人間の智力では生き物を作ることが出來ない、生き物を作れる學者はない、如何に智力が盛んても、人間や草や木を作ることを得ぬ、生命あるものを作ることが出來ぬ、之は絶對に不可能である、親は子を製造し得たと云ふが、親は子を作り得るものでない、子の生れたと云ふのは人智でない、人間の親は子供を作るものでない、然らば何ものが製造するものであるか

▲人生は何か生命は何か

と云ふ問題を研究せずして、人格の價値を觀ることは出來ない、人間の智力學問によりて解釋するとせば大なる誤りである、生命は自然科學によりて説明し得るものでない、又多くの哲學者が、生命問題を論じて居るが滿足すべきものは見出さないのである、オイケンは在來の哲學では、人生生命を説明することが出來ないと言つて居る、然らば此の問題を何に依て説明するか、從來は宗教であると考へて居つたのである、然れども智力が進んで來ると、宗教が道理に契はぬ處あるを智力によりて自覺する、例へば人形を生きたものゝ樣に思つて居つたのが、成人するに從て誤りであると云ふことを知るは教育の力である、又宗教上の信仰に就ても、根本に間違あるを知る樣になりましたので、歐米諸國に於ても迷信者の外は、耶蘇教を信仰することを得ざるに至つて居る、人智の開發した今日に於ては、耶蘇教の根底は破壞されて居る、それが歐米諸國

の大勢である、學問によりて人生を説明し盡さんとして居りますから、人生の動搖を來すのであつて、卽ち享樂を生じ、人間は人間其ものを疑ひ始める、而して地球其ものより顚倒するやも知れぬと疑ふに至り、根本的に危險を含んで居る、斯の如くして

▲何に依て安心すべきか

物窮まれば通ずと云ふが如く、仕方がないと云ふても屈伏せぬ、之を自覺したる時に代はるものを考へる、オイケンの精神生活、ベルグソンの精神變動、ニツチエの自己神と云ふが如き思想はそれである、彼の耶蘇教は神其ものが創造者である、吾人は神其ものに成ることを得ない、神人合一と云ふ樣なことを云ふが、耶蘇教が根本から間違つて居ることを證明する、又オイケンの説は、吾人人間が神を創造し宇宙を創造すると云ふ事になつて居る、而して之は現代科學の失敗と耶蘇教の失敗に代はる思想であつて、我等其ものを一層貴重なるものとおもひ、哲學的基礎の上に位置せしめなければならぬと云ふて居る、オイケンは耶蘇教を通ふして居ると云ふて居るが、新らしき形式に於ての耶蘇教を作りて維持せんとするものである、オイケンの宗教觀を批評すれば、自然生活精神生活とが一致した本体を神として居る、哲學自身が宗教的信仰的であつて、吾人人間が信仰の本体であると云ふて居るので、之は耶蘇教の辯護にはならない、寧ろオイケンの説は今の耶蘇教を敵視して居るものである、吾輩はオイケンが今一歩、宗教の研究を進めざるを悲しむものであります

▲哲學者は佛教に對して

印度に起つた佛教であるから、悲觀主義であつて活動主義でないと云ふ、歐米人が佛教を理解する機會のないのは無理もないが、彼等は佛教中の小乘權大乘を見て居るのである、固より佛教中に悲觀厭世の思想がある、我國の佛教は悲觀厭世であると申しますが、大部分はそれに違ひない、耶蘇教や哲學者が云ふて居るの

も無理てない、而し之は果して佛教の本旨てあるか、現在我邦の多くの佛教が教ゆる所は、未來が安穩になりたいと考へて居るのてあるが、耶蘇教の天國に行きたいと云ふのと同じてある、人は極樂往生したいと云ふが、それだけに依りて佛教ならば間違てある、若し斯かる思想を國民一般に普及したら大變てある、帝國の存在は如何にすべきてあらうか、極樂や天國に行くが爲に善を爲すものならば、不都合此上もないことてある、富籤に當らんとするのと同じてある、人間か僅かな善行を爲して極樂に行くことが果して出來るものてあらうか、努力に限りがある、賽錢を上げて報酬を得やうとするのは不可てある

▲然らば佛教の本義

は何んなものてあるか、先づ佛教を究めんとせば教説の大系を知らねばならぬ、佛世に出てゝ始めて高尚なる華嚴を説いた、處が聽衆の機根熟せずして理解するの能力がなかつたから、小乘を説いて世相の問題を示し、此世は苦界てある人生は苦しみてあると説かれたることは事實てあるが、之は佛の眞實の精神てはない恰かも赤兒を生育せしむると同じ樣に、漸次機根を調熟せしめたので、段々と説き去り説き來りて、四十餘年の所説は未顯眞實てあると斷案を與へ、而して、佛陀の精神たる法華經を説いたのてある、この法華經を其まゝに説き行ふたのが日蓮上人てある

▲人間は常住の佛の生命

を有つて居る、萬世無窮に存在する、一切の人間は佛性を具へて居る、それを磨いて開顯したものは佛となる、久遠の佛は無上發展の道を説かれたのてある、吾人の佛性は無窮に存在することを説いて、無上の發展を促進せしむるものてある、現代の哲學は一部分の眞理を横から見たものてある、若しオイケンが日蓮上人の主義を理解したならば、必らず久遠の本佛を信ずるてあらうとおもふ、オイケンは未だ眞實の佛教に到達せざるものてあるが、オイケンの耶蘇教は法華經に近

よれるものてあらうか、釋迦の教は日本人のみの專有てない、唯一の眞理は世界人類の共通てある、吾人はオイケンをしてこの眞理に近くことを可とするものてある、然らに日本の哲學者宗教家の態度は何うてあらう、人生の眞理てある法華經及日蓮主義に對して、小さいものてあると云ふて居るが、何たる情けない有樣てあらう、日蓮上人の教は哲學上の根本問題てある

▲永久不滅を教ゆる

從てそこに無上の發展がある、さうして努力の精神が湧いて出る、日蓮上人は偉大なる畢生の力を盡して、人間の人間たる道を行ふて居る、生命は無限てある、過去の因は現在の果となり、現在の因は未來の果となるのてある、人は意義ある生活と云ふが、禽獸的生活は不可てある、尊とき生活は努力奮鬪にあるのてあります、日蓮上人は各人に題目を唱へて無限向上を爲さしめんがために、偉大なる慈悲を垂れて居らるゝに拘はらず、之に心を用へざるは不都合てある、假し上人を仰ぐとも迷信の如き信仰は不可てある、吾人の立場を明かにするには日蓮上人に頼らずんば説明することが出來ない、或學者の説くが如く吾が生命が肉の殘れたる時に、大生命に合致するものとせば、向上努力は起らぬ、吾人はこの説を否定するものてある、吾々の生命は永久に吾々の生命てある、本佛の前に無上發展する法華經の根本道理てある、吾人は日蓮上人の血肉を通ふしてこの問題を研究せなければならぬとおもふ而して今日の

▲教育と宗教

との問題に關しては、學校としては今の宗教は不可てあるが、教育者が宗教を不可として自己を修養することなくして、自己の識見のみを以て他を教ゆるが如きは、教へられたるものは人格を磨くことが出來ないてはないか、口に忠孝を知つて居つても、身に行ふことが出來ないならば忠孝の人てない、而して人は自己の不滅を理解して道德を知り、之を實踐窮行せんければ

ならぬ、自己の不滅は何に由て理解し得るか、卽ち宗教其ものである、故に宗教を離れたる道德は花瓶の花の如きもので、日數を經過せば枯れて仕舞ふ、宗教から培養せられて、始めて立派な花にもなるし實にもなる、日蓮上人の敎に由ると、親に孝行を爲すも君に忠節を盡すも、至誠感恩の念より發動せなければならぬとありますが、生命を無上に發展するには、大なる善行を爲さなければなりませぬ、念佛門の如く一向專念主義を立て、彌陀の誓願に賴り、倫理道德の實行を顧みない樣なものは、取るに足らざるのみならず排斥すべき主張である、恐るべき思想である、國民が宗教問題に注意を佛はぬから、之等の宗教が勢力を有して居るけれども、大に敎育を盛んにして思想上の事に氣を付ける樣にせなければならぬと考へる、然るに現在の日本人の中には、我國の敎育は進み過ぎたと云ふ考を持つて居るものもありますが、敎育を盛んにして智識を進歩せしむるにあらずんば、眞實の敎と光りある人生を現はすことが出來ない、男女共に思想を高尙にして、宇宙の眞實相を研究するやうにせなければなりませぬ、眞の宗敎を弘むるには敎育を盛んにする必要がある、我國に於て日蓮上人の敎は輕視せられて居るが、上人の敎は日本國家の上に重大なる關係の存することを忘れてはならぬ、上人が當時北條の權力に對して一身を賭して戰はれたのは、抑も何のためであるか國家の精華なる大義名分の爲である、北條の暴逆を憤りて大義名分を論明したから、北條が壓迫を加へたのである、上人が徒らに他を攻擊するが如く考へて居つたのは誤りである、喰はず嫌ひである、國民は之を研究する義務がある、世人若し虛心坦懷に上人の主義を研究し、自己の人生を說明するに適するならば、此世に生活することが愉快に感ずることであるとおもふ、吾人は物質文明の進歩によりて不滿なる社會を作りて居るが

大正年度の 最大問題は、我の自覺より立つて 完全なる道德を行ひ、正しき宗敎を信仰して無上に發展するに在りと信ずるのであります

日蓮主義と名士

◎第七師團長林中將閣下

▲將軍は金澤出身者中の陸軍の頭目であると聞く、軍幹長 大豐滿 であつて威風堂々たるものである、將軍が劍を提げて立つ所、自から三軍叱咤の權威を具へて居る、けれども少しも恐ろしい樣な風がない、相對して見ると、何だか懷かしい叔父さんの樣な心持になつて抱かれて見たい氣が起る、邪氣がない、げにや天晴會の姉崎博士は、四十四年の九月であつたとおもふが九段の偕行社で將軍の榮轉を祝したとき、將軍に對して我黨の布袋樣であると云つたことがある、將軍の人格が圓滿であることは之を以ても証明し得らるゝが、將軍は熱烈なる日蓮主義の鐵仰者で、敢て議論を好まない、身讀主義躬行主義であつて、北海道の軍營に指揮することゝなつてから、全道の風俗習慣や思想狀態を調査して、健全なる思想の涵養を圖らねばならぬことを感じたがために、大正二年の冬、畢生會を起して廣く天下に發表するに至つたが、此の聲を聞いて全道の識者翕然として之に贊し、大正二年十二月廿日發會式を旭川に擧げられた、發會式における將軍の講演に

私は北海道に參りましたのは一昨年の九月でありまして、今日では已に二箇年も經過しました、此間に北海道全道の重なる地は、殆んど跋涉し親しく民情をも視察致しました、特に每年本道から入營する約二千七百名の壯丁の精神狀態を見聞するに、遺憾ながら內地の兵に比べると夫れより遜色あるやうに感じます、茲に一寸御斷致しますが、私の此所で內地と申しますは、北海道を除いた本州九州四國等を指すものと御承知を願ひます、皆樣御承知の通り、內地にあつては各縣又は舊各藩每に其縣又は其藩に一種の言葉がありまして、交通機關の發達しました今日に於ても、尙ほ長州は長州、薩州は薩州、大阪は大阪の言葉があります、して、各其利害得失はありましようが、鄕を愛するは國を愛するの基と謂ふ言葉

の意味より謂ふ時は、其郷其縣を愛することは決して惡いことではありませぬ、否我帝國を愛するの下地として大に賞賛すべき價値あるものと思ひます、併しながら何時までも其郷其縣のみを愛して他郷他縣を冷視し、夫のみならず我國家を尊重せざるに至つては、世人の所謂長閥薩閥又は何閥々々と謂ふ狀態となり、之は實に國家の進運を妨ぐる大害あるものと思ひます、併し郷里を愛し國家を愛することは必要なることゝ信じます、熟ら〳〵北海道の狀態を觀察しますするに、一二の都會を除いては其郷則ち町村を愛するの觀念極めて乏しい樣であります、況して北海道を愛するの意向に至つては殆んど皆無と云ふも敢て過言ではないかと信じます、譬へ町村を愛するにしても、内地と比較すると町村を愛するの精神は誠に乏しい樣に思ひます、又譬へ旭川の町を愛すると云ふことはありましても、北海道を愛すると云ふことはない樣に思はれます、換言すれば我居住する町村を愛せざる人々が、我日本の國家を愛すると謂うことに就ては如何でありませうか、私は斯の如き精神の人は國家を愛する念薄弱であると思ふのであります、然らば北海道に住居する人は、何故に其住居する郷里を愛せざるやと云ふに、其原因は極めて單簡なことであります、即ち北海道の人口は約百七十萬人でありますが、其大部分は近く三四十年以來三府四十餘縣から移住せられ、今日の如く多數となつたのであります、夫れ故町に住んでも隣に住める人は如何と謂ふに、内地に在りては數百里相隔つる異郷人であります、從て自然疎遠に流れ易くなる、況んや北海道の邊鄙に行くと、一村でも二十里に亘る所が少くは御座りませぬ、斯かる狀況でありますから年中出遇ふと云ふ機會がなくなります、從て自己本位となる、其結果不知不識の間に國家觀念を消滅する樣になるのであります、斯の如き狀況なるが故に、北海道に於ては内地以上に精神修養に勉むることは必要であると思ひます、此畢生會の創立もこの必要を

感じたのが動機となつたのであります

以上は講演の一節を載錄したに過ぎないのであるが、將軍が精神問題のために親から陣頭に立つて躍進して居るかゞ窺はれる、將軍は一個武辨の人でない、文武兩道の本源を發揮して、まづ始めに北海道の風教を樹てんとする、而して更に其奥には偉大なる運動の力が偖在して居るのであらう、眞に當代に於て容易に得べからざる國士である

▲將軍の兵を用ゆるや、疾きこと風の如く侵掠すること火の如くであつて、其戰鬪振りが如何に潑溂たるものであるかは、部内の驚歎する所であると云ふことだが、曾て日露の役、伏見の旅團長として奉天戰に參加した時、第四師團前面の敵頑强であつて、我軍動もすれば敵に壓迫せられんとするの形勢があつた、此時將軍は憤然自から一大隊の兵を提げて陣頭に立ち、進擊又進擊、遂に頑强なる敵を摧破し、尙ほ勢に乘じて進擊し摧破し、且つ屢々夜襲を試みて遂に敵をして頽勢を挽回するに暇あらざしめなかつたと云ふ

▲將軍は陸軍大學校の出身である、けれども學閥臭味なぞのないのは勿論であるから、何時の世でも流行である長閥や薩閥の考へのないことは、將軍自身の告白する處である、將軍旅團長であつた當時、一日其師團參謀長である長閥の一人と論爭し、猛烈に長閥を攻擊したさうだ、處が參謀長は癪に觸りけん、左程攻擊するならば宜しく陸軍を退くべしと冷笑するや、將軍は言下に、將軍に對して何を言ふ無禮者めと叱咤して長閥を驚かしめたと云ふことだ

▲將軍が日蓮主義鐵仰の發端は、四十二年の暮天晴會に入つたのが始めて、今の統一閣の前身である小さな會堂で、毎週一回本多大僧正の法華經の講義を聞かれた、將軍は必ず一定の時刻に來る、聽講中はキチンと靜座して身動きもしない、態度は至つて謹嚴である、けれども其應接會釋は平民的である、げに將軍の風格日蓮主義によりて鍛練せられたものであらう

開結二經の研究（三）

井村日咸

▲教法觀

此經の第二說法品は、第一回に申上たが如く、佛陀の教說に就いて統一の歸趣あることを示されたのてありますが、今經文に就いて御嘶申上ます、此說法品は、大段二段に分れて居ります、大莊嚴等の菩薩と釋尊との間に二回の問答が交換せられて居るのて第一回の問答は、先づ諸菩薩より如何なる法門を修行して大菩提を得べきやとの問に對し、如來は、一法門ありと答へ給ふ、菩薩重ねて問ふ、其法門の名は何と云ふや（問數）何の義を說くや（問理）、如何に修行す、きや（問行）、佛之に對し、先づ名を答へて『是一法門名無量義』と敎法の名を示し、次に第三回の行法を答へて、『應當觀察（一四頁五行）……復觀卽時生住異滅（七、一五、）』と說いて、諸法緣起の相狀を說き、衆生は妄計して、是非得失を誤る之れ無明緣起なるに依る、菩薩は諦觀して深く諸法の實相に入り遍知することを得るは、法性緣起に依る旨を明し次に其緣起の根源卽ち一實相の妙理に外ならざる旨を明して、『無量義者從二一法一生、其一法者卽無相、如レ是無相無レ相不レ相不レ相無レ相、名爲二實相一』と說きて第二問の理法を答へ給ふ、此にて問に對する答辯は已つたのてあるが、更に進んて實相の功能を擧げて、『菩薩摩訶薩安二住如レ是眞實相一已所レ發慈悲明諦不レ虛令二諸衆生受二於快樂一』と明して、菩薩摩訶薩（人因）の此に安住すべきを示し、次に其行果を擧げて、『修一切法門無量義者必得疾成三菩提』と說き、進んて敎、行、理、人、果の五法を敎法無量義經に統攝せんとし、之

を一結して『如是甚深無上大乘無量義經文理眞正尊無過上三世諸佛所二共守護一』と云ひ、更に一轉して、『是故善男子、若欲疾成無上菩提應當修學如是甚深無上大乘無量義經』と說きて此敎法を受持修學すべきを勸說せられて前段の問答は終つて居るのてあります

第二段の問答は、其趣旨は簡單てある、前段に說き給ひし、一實相の法門に就いて、世尊成道已來の說法に於て說き給ひし處と、今說き給ふ處とは殆んど同樣に思はるゝにも係はらず、特に此經を推奬し給ふこと不審と問ひたるに對し、文辭は一なりと雖ども而も義各異なり、四十餘年の間は衆生の性欲不同なるが故に種々に說法したのて眞實てはない、方便の說てあると云ふて、有名な『四十餘年未顯眞實』の說法があつて之を井池江河等の諸水の垢穢を洗ふに譬へ、之を結して『善男子以二是義一故、一切諸佛無レ存二二言一、能以二一音一普應二衆聲一、能以二一身一示二百千萬億身一』と說き諸法諸身の根元必ず一なるべきを說かれたのてある、此後段の說明は前段の『無量義者從二一法一生』の意味を更に詳しく、而して之を敎法の統一の上に論じて參りましたのてあります、以上は經文に就て大要をお嘶致したのてありますが、此二段の問答の中に敎法觀として何以いふ意味が說き顯はされて居るかと申しますと、

(一)敎法と五法との關係、(二)敎法と佛陀との關係、(三)敎法統一の理想との三點てあらうと思ひます

(一)敎法と五法との關係

は前品に、佛陀若くは菩薩の中に於て、五法の具備せられあるを認めたが如くに、敎法の中に此五法の統攝せられてあることを見て居るのてある、顯示しますと

無量義經（敎法）
如是甚深無上大乘無量義經文理眞正尊無過上

- 敎法……是一法門名爲無量義
- 行法……應當觀察一法諸法等
- 理法……一法者卽無相也名爲實相
- 人法……菩薩摩訶薩安住如是眞實相
- 果法……必得疾成無上菩提

斯樣に敎法の中に、眞理も修行も、證果も含蓄せられてあるものと見るのは、佛陀起敎の順序として、當然斯くあらねばならぬ譯てありまして、一切の眞理も佛

陀の證悟も修行の方法も、佛陀の教を離れて存在すべきものではない、教を離れて之を求めんとするならば猿を離れて肝を求むるの痴漢である、斯く云ふと教相に封ぜらるゝものと云ふものがあるかも知れぬが、經文の文字に囚はれ、語句に著するものならば、所謂文学の法師として排斥致さるゝものでありますが、其教の説示する所を標準とし規矩として實踐躬行するにはそういふ誤のあるものではない、此教法の中に一切を攝して見て行く見方は、日蓮上人の判教の網格とせられました、『教に依つて理を推す』と云ふのに一致して居るのであります、此網格を遡しますと、權實雜亂本迹混淆の混沌思想と相成つて仕舞ふのであります、教法を輕視して、理法を高き處に置いて、宇宙の大根源大眞理抔と崇めて之を根本とする思想は、此は觀念系統の佛教に顯はれたので、天台宗や禪宗は皆此思想でありますが、信行門の系統は之に反して、教法の中に理法を攝して見て行かねばならぬのである、然し現今の日蓮主義者の中には此思想が判明しないのがある樣で、爲めに教義上幾分の紛亂を生じて居る樣に思ふのであります、此教法に理法を攝する意味合は神力品の結要付屬の文に最も明白に顯はされてあります、同品の五重玄の結要は今品の思想と全然同意味に成つて居ります、結要の文は

如來一切所有之法名・教法・體（此經の名なり）

如來一切自在神力…用…行　法

如來一切秘要之藏…体…理　法

如來一切甚深之事…宗（因人法　果法）

皆於此經宣示顯説…教

別

斯樣に爲つて居りますが、此品の無量義の一經に結束したのと其意は異なつては居りません、次に

（二）教法と佛陀との關係

でありますが、此品には佛陀の起教の元意を菩薩に托して明されて左の如く説かれてあります

菩薩摩訶薩是の如き眞實の相に安住し已つて、發する所の慈悲明誓にして虛からず、衆生の所に於て眞に能く苦を拔く、若既に拔き已つて復爲めに法を説

て諸の衆生をして快樂を得せしむ

是れは佛陀の大慈悲の御思召によつて、教法の存在することを説明してあるのであります斯る思想は佛陀と教法との關係としては當然であるべきもので、論ずるまでのものではありませんが、過去に於ける大乘諸宗通有の思想にして、壽量品の應身常住の眞意義を會得せず、徒らに法身常住論に囚れたるが爲めに、教法即法身舍利の思想を生じて、教法を偏崇するの反動として佛陀を輕視するの風を生じ、その結果として、經の一文一句に神秘的意義を加へて、眞言秘咒を尊崇するが如き信仰と爲り、一面には佛陀の慈悲を忘却して觀念自力の行法に依るものありて更に教法をも輕視して理法を尊崇し佛母實相の義を以て最極とせし本師世尊をも實相の妙理の前には叩頭せざるを得ざるものと思惟して、理本事迹の見に墮して居るのでありますがそれが爲めに佛陀と教法との關係も教法と理法との關係も判明を缺くに至つて居る次第でありますが、然しながら、是は壽量顯本の妙旨を知らず、本化再身の示教に俟たねば分らぬ事でありますから、過去に於ける大乘諸宗の見解の誤謬は恕すと致しましても、本化門下の中にまだ此關係の判明して居らぬものもある樣でありますが、實に嘆かわしき次第と存じます、此經は此點は至極明瞭になつて居ります、第一品に佛陀説法の儀を歎し、今品に其佛陀の説法を論じて其説法の中に理法を攝することを明したのは、此三者の關係を意識するに充分であります、尙結歎の文に、此經は文理眞正尊無過上にして、三世諸佛共に守護し給ふ處と明して佛陀の御手に保護せられ任持せられ居る教法なりと言はれたので、神力品に如來一切の言を冠せられたるも同意味であります、之れから

（三）教法統一の理想

でありますが、是は前に申上た通り此經は從一出多の演繹的方面を説かれたので、歸納的方面を缺いては居りますが、兎に角四十餘年の所説の教法を列擧し來つて、未顯眞實と大斷定を下し、無量義は一法より生ずとして、一法の根原を示し、諸法必ず一根に歸すべき

ものとの意味を明して、法華經開顯の前驅を爲したことは、此經の諸經に超越したる特徴であります

以上は說法品に顯はれたる敎法觀の大樓でありますが此敎法觀は、法華經の中にも特に本門の思想に接近して居る思想であると認むることが出來るのであります

日蓮主義より見ますと、余然一致して居ると認めて差支なき事と存じます、以上の兩品に明されました佛陀と敎法との二は、敎觀二門の中では、敎門に屬するもので、此が本尊の主體となり、在世滅後を通じて、信仰の對象となるべき主體を擧げたのであります

▲行法觀

此經の第三十功德品に入つて、敎法撰擇の方針を示して、菩提の大直道を取つて行せば大利あり、若し大直道を得ずんばこれ大利を失ふなり、險逕を行くに留難多きが如しとして、先づ修行の大体方針を御訓示に相成りました、そこで大莊嚴等の菩薩は世尊に『是經典者、從何所來、去何所至、住何所住』と、此經の來至住の三義を問ひ上つた、『世尊は此に對して、『善男子、是經本從諸佛室宅中來、去至一切衆生發菩提心、住諸菩薩所行之處』と答へられましたが、此來至住の三義は佛敎行法の極致を道破したものでありまして、觀念系統のものには、此三義に依つて顯はされた意味合を了解することは難いのであります、第一の『諸佛室宅の中より來る』と云ふは、諸佛の室とは大慈悲心是也と云ふて、佛陀の大慈悲心より發作し來りしもの即是經なり佛陀の大慈悲は此愍むべき衆生を見て救濟せんと欲し口輪の說法となりて顯はれ來つたもの即佛の敎法である、是敎法を聞いて、衆生頓に發心し、如來の大慈の御手にすがりて救濟を求むるに至つて此に眞實道交の利益あるのである、之を一切衆生の發菩提心に至ると云ふのであります、衆生既に發心し己つて、佛陀の所說に隨順して、實踐躬行する處に眞實の利益は顯はるゝのである、之を菩薩所行の處に住すと云はれたので此佛陀の慈悲と吾人の信念とが接觸する處に佛敎行法の極致は存するのである、自力を恃みて觀念行を以て進んで行くものには、此處の妙旨は不可解のである、

此來至住の三義は即ち日蓮聖人の三大秘法であります

本門の本尊…來…本佛の大慈悲を主体とす

本門の題目…至…吾人信仰の表現なり

本門の戒壇…住…今身より佛身に至るまで受持す

三大秘法は日蓮聖人宗旨の最要でありますが、此は即來至住の三義に外ならないのである、吾人の信ずる本門の大本尊は久遠實成の釋迦牟尼世尊、我等末代の衆生を愍んで、是好良藥の妙法蓮華經を今留在此せられた御表である、此即ち此經に諸佛室宅の中より來ると說かれた意であります、又本門の題目は、末代吾等衆生の佛陀の大慈悲に感奮して發菩提心し、大良藥たる妙法蓮華經の五字を信受口唱する姿を言ふのであるから、此經に一切衆生の發菩提心に至ると云ふに當ります、本門の戒壇は今身より佛身に至るまで此信仰を維持すべきを誓ふものなるが故に、此經の菩薩所行の處に住する意味と相成るのであります、斯樣の意味に見て參りますと、是來至住の三義は言は簡單でありますけれども、佛敎行法の最要義を說明致して居るものと言はねばなりません、而して佛敎行法の歸趣を信行の一行に統攝して、觀念系の佛陀を輕ろんじ、敎法を蔑視するの大弊風を一掃せられてあることは大に注意せねばならぬ點である、それから、權大乘諸宗の多くが現在の世を輕ろんじ、未來觀に偏せしにも係らず、此經は現當二世一貫の趣旨を立てゝ居ることも亦注意を要すべき點であると思ひます、此點は來至住の三義を述べた處には明かならざれども、次の十功德の中の第一の功德に、現世相待の益を擧げて居る點より推して見て推測し得ることゝ思ひます、此來至住の三義は敎觀二門の中には觀門に屬すべきもので、在世滅後の衆生の實行すべき方法を說明せられたのであります、上來申述べました樣に、此經に明かされました佛陀觀、敎法觀、行法觀が、何れも本門の所說に接近し、日蓮聖人の敎義と一致する點の多きことは實に不思議に感ぜられますのであります、此經の研究も次の一回を以つて終ります

スエズ運河より通信

（統一園會員若濱理八氏より記者に寄せられたるものなるも宗教お海上生活に力强きかを知るに足る依てこゝに掲げぬ（白碧生））

大正二年六月横濱を出帆してより本年一月廿五日に至るまで、三萬五千二百八十二海里の航海を續けた、内地の山水の風光に接することを得ないが、身心頗る頑健である、日本は島帝國である、われ等海員は海國のある處ならば何處へても行く、素人が横濱より函館に行くより樂である、商船は碇泊を短くして航海を續けて居る樣でなくては駄目だ、自分の船の如きは特殊の任務あるものだが、六千噸の荷物を四十五時間で陸揚げすることが出來る、之ではまだ充分の成績でないから、大正三年は大に奮勵して七萬海里以上の航程を行つて見ようと思つて居る、旅は活ける學問で事實の智識であると聞へて居つたが、眞にその通りで、始めて『ペルしや』灣に着た時、少年時代に地理の講義で聞いた『ユーフラテス河』なんぞは有無を疑つて居つたのだが、大砂漠から吹いて來るサンドストーム（砂の風）が、滿州なぞよりも激しいのを目擊したが、何等苦痛の念は起らなかつた、固より海上生活の職分にあるものは、大西洋の浪もピーケーの海もペルシやの暑さにも、四年や五年は戰つて見なければ、島帝國の民族たる資格はあるまい、然しながら自已の家庭と離れて見渡す限り大海原の上に、船を浮べて生活するの身は單に技術や體力の强壯のみでは耐え得られるものでない、どうしても船員自身の心の奥底に確信の力があつて、それが偉大なる大靈格の懷ろに包まれて居るのでなければ風と戰ひ浪と戰つて永い月日の辛抱が出來るものでない、佐藤將軍の講演に身退けば名進むと云ふ警句があつた、この活文字は遠洋航海に在る吾人の精神を鍛練する教訓であることを感謝する、

人は肉に飽きて靈に飢へて居る、靈は久遠の生命であるが、渴仰の至誠がないから發動の力がない、予は日蓮上人の教示によりて之を知るを得た、予が上人によりて啓發せられたる自覺は、自已の天職のため全力を以て努力せよと云ふことである

▲北海道巡教通信

井村日成

第一信

統一記者足下、今回嚴師猊下は林第七師團長閣下の招請に應じ北海道巡教の途に上らるゝべく決定し、不肖に其隨行を命ぜられたり、予は元來呼吸器に障害を有し例年嚴寒の候は咳嗽甚しきを例とせるも、本年は不思議にも身体頑健にして何等の異狀なかりしと、衆ての覺悟として聖祖門下の一員たる上は如何なる事柄をも辭すべきにあらずとの信念よりして、猊下の命に接すると共に直に命を奉ずとの答を爲し、即時に準備を調へ申候、來る九日を以つて出發するの豫定に有之候朔北の地嚴寒の候は積雪時には汽車をも埋沒すと聞けど、人類の棲息するの處、如何に寒威凜烈なるも何程の事やはあると覺悟はせるものゝ、零下三十度と聞いては、經驗なき身の流石に前途危ふまれ申候も、聖祖上人が佐渡雪中の苦行を思ひ合せて何のそのと奮起致居候（二月十七日出發前二日）

第二信

統一記者足下、猊下は十九日午后六時、矢野檢事山田博士野口僧正等宗内僧員諸氏の見送を受けられ列車中の人と爲り給ひぬ、不肖は同乘の榮を擔ひ申候、車中は蒸氣の溫熱にて寧ろ暑苦しく覺へ申候、列車は海岸線廻りにて、東北線中に風光の美ありと稱せらるゝも暗夜の疾走には何等の趣味も無之徒らに眠を貪り申候盛岡附近にて夜は明け放なれ申候、野邊は一面に白雪に覆はれて岩手富士の雄姿の屹立するを見るのみにて單調なる風光は心淋しく感じ申候

尻内驛にて中田量叔君と本壽寺惣代人の八の戸より來りて見舞はるゝありて、同地の飢饉の慘狀聞及申候、午前十一時青森驛着、同驛にて中村謙三阿部秀三の兩君及他一名の出迎を受け申候、列車を出づるも寒さは思ふ程には無之候、休憩中中村君の談話にて本年は寒氣意外に緩かに從つて降雪稀少山林の作業に支障を來すとの事を知り、前途危惧の念は稍薄らぎ申候へども、予等一行の目的地たる旭川の地は國内最寒の地にて、滿州の長春と溫度を同ふすと聞いては聊かたちろかざるを得ざる次第に有之候、午后一時前記諸氏の見送を受け青函連絡船田村丸に乘込申候

（二月二十日午后二時田村丸ニテ）

第三信

統一記者足下、娑竭羅龍王が其女の得脱の恩を報ひんが爲めに、法華行者一行の遠征に敬意を表せんとてや波浪高きを以て稱せらるゝ津輕海峽も、鳴を鎭めていと平かに、船は機關の音のみ高くて些の動搖をも感ぜず、船客をして安き眠に入らしめぬ、船員の語る處に依れば斯る平穩なる航海は一年南三回に過ぎずと、多幸なるかな、午后五時二十分着函、直に上陸待合所に入りぬ、室内には炭火の山、此處に一團彼處に一團と積上げられて室内は溫暖なるも室外は北海の關門たる丈に寒氣身に泌み込むを覺へ申候午后七時二十分又も滊車中の人と爲る、車中は乘客夥しく北海人士の各地に於ける活動の彌が上にも旺盛なるを思はしめ申候、小樽驛附近にて天明、初めて北海の風物に接し申候、見渡す限り白皚々として、一點の青色を見るを得ざるは北海の冬の特色を顯し居るものと思はれ申候、岩見澤驛林第七師團長閣下管内巡視を終へられて歸團せらるゝに會し同車致候、車中にて同將軍が奉天會戰に於ける戰況を承り勇壯の氣自ら發し申候、神居古潭の絶景は北海第一の勝景とか、夏期深綠の候に於ては嘗かし美事の事と思はれ申候、午前十一時旭川驛着、矢野同師團參謀長細野中佐等師團將校數十名淺川支廳長市來警視妙法寺住職信徒等數十名の出迎を受く、猊下は師團長閣下と同乘、不肖は細野中佐大内副官と同乘し行程一里半師團長閣下の官舍に入り午餐の饗應を受け午後四時旭川偕行社に菲の身を休むることゝ相成り申候、偕行社宿泊は林閣下の好意に依り師團の賓客として優待せらるゝものに有之候、此日の氣溫壓氏零度との事、夕刻より降雪ありしも左程の寒さと感じ申さず候此分ならばと稍安堵仕り候、案ずるより生むが易しとは此事かと存じ申候、明日午後二時より佐々木座と申す劇場にて畢生會講演の豫定に有之候

（二月二十一日午後五時旭川偕行社にて）

第四信

統一記者足下、本日は昨日よりも寒さを感じ申候、零下五度との事に候、今朝滯旭中の講演日程を左の如く定められ申候

二十三日
午前九時半　歩兵第二十六聯隊　午後二時　歩兵第二十七聯隊

二十四日
同　歩兵第二十六聯隊　同　將校婦人會

二十五日
同　野砲隊、騎兵隊
各司令部、兵器支廠　同　旭川將校團

二十六日
同　歩兵第二十八聯隊　同　工兵隊、輜重隊
二十七日　地方團體　病院、監獄

軍隊講演は猊下の專ら擔任し給ふ處に有之候不肖は本日午後の畢生會講演と將校婦人會と地方團體の爲めの講演に出演すべき豫定に有之候、軍隊講演は何れも千人以上の集團にして而も智識程度の異なるものに對するものなれば、非常の聲量と無碍の樂說とを兼備したるものにあらざれば難しとする處と存じ候

午後一時馬橇に乘じて畢生會場に向ひ申候、會場佐々木座は旭川町一條通に在り會衆一千人を容るゝに足る昨年末畢生會發會式の擧げられしも此處なりと聞及候定刻に先だち會員及聽講者の參集するもの踵を接し、定刻二時には既に滿場の盛況に有之候、講演は左の順序に依りて開かれ申候

一開會の辭　淺山理事
一生活の眞意義　井村日咸
一大和魂と畢生會　本多大僧正
一閉會の辭　林理事長

淺山理事は茲に畢生會第三回講演を開く旨を宣し講演者を紹介せられたり、不肖は近代の人生觀は人生の目的と手段とを混同したる結果として、目的を遂し手段に全力を注ぎ爲めに生活難就業難の聲を聞くものなるを論じ人生をして煩悶苦惱の中より救濟せんことは吾人人生の其目的を會得し　に向つて勇往邁進するの外なく、斯くして人生の眞意義を解せば忠孝仁義の道德も自ら發生して人間向上の途を得るものなることを約一時間に亘りて論述したり、續いて猊下には先づ序論として精神問題の講究は人生の上に必要缺くべからざるものなりと說起して畢生會の主義目的に論及し、次て本論に入りて大和魂は我國建國の事實理想より發して二千五百餘年の歷史の洗練を歷て茲に形造られたる日本文明の中抽即大和魂にして、包攝統一の大精神是なりと結論し給ひぬ、時を費すこと二時間餘林理事長は畢生會を代表して閉會の辭を述べ猊下の來道を謝せられたり、午後五時閉會す、本會終つて一行の爲め慰勞の懇話會を第一樓々上に開かる、會するもの林、宇宿、高橋三將軍閣下を始め旭川知名の士百餘名なり、鐵道院旭川建築所長の開會の辭あり猊下の挨拶ありて直に宴會に移り申候、宴會中旭川某銀行支配人元山氏の過去に於ける宗教殊に佛教僧侶に對して懷ける感想より說き起し昨年猊下の講演を聞いて動執生疑し次て畢生會發會式及今回の講演を聞いて翻然悟る處ありたりとて抑揚波瀾實に痛快なる懺悔談を爲し、猊下に更に一層の敎誨を求められ、猊下は立つて懇諭せらる、列席の人も大に得る處ありたるやに見受けられたり、午後十時宴果て宿所に歸り申候、今夜の寒さは身に泌み申候　（二月二十二日午後十一時認む）

活動史

東京　思想の問題は一朝にして功を奏するものでない嗜だ精進の氣字をいだして斯道の爲に奮ひ起つべきである

▲二月八日統一閣に開演熊井本光師は一代の教相に關する大系を述べて日蓮主義の超勝せる所以を示し井村日成師は人生の幸福は物にあらず心の滿足に存するを說き本多大僧正は佛敎は靈肉の調和を敎ゆるものなるを以て人間の面目を發揮せんとするものは之を尊信すべきものなりと結び聽衆に一種の靈光を放つた

▲十五日午後二時統一閣に開演三上義徹師は日本人としての日蓮上人は遺憾なく民族的精神を發現したる模範的大偉人なりと論明し山名日宗師は人は自己內部の生活狀態を公開し得るの公明なる修養を積むべきもの若し公開し得ざるものは人として價値なき所以を詳說し其熱誠溢るゝの廣長舌には深く感動するものあるを見うけた

▲十六日午後二時より日蓮上人降誕會を行ふ本多大僧正導師の下に森嚴なる大法要を修して報恩の資に供ひ式後本多大僧正は日蓮上人の偉大なる功績を擧げて渴仰の誠意を捧ぐべしと說き小林文學士は生活問題より說き起して煩悶を除くべき力は宗敎の信仰に在りと結び平易簡明の譬喩を擧げて聽衆の肺腑を衝くものがあつた

▲二十二日午後二時統一閣講演此日雨天なりしかば聽衆少なかりしも熊井本光師の打破して面して與ふる日蓮主義の特色に就て熱心能く之を說き野口日主師は夢と信仰との關係より說き起して僞らざる夢は生活の眞相を現はすものなれば常に修養に心懸くべしと懇論して處世の指南を與へた

▲三月一日午後二時統一閣講演鈴木日雄師は宗の意義を說いて獨尊の宗敎は日蓮主義に存する理義を明かにし三上義徹師は宗敎對象論に就て各宗の根據の弱きを說り一面に偏する宗敎は現代の要求に應ずる資格なきを斷論し人法不二の日蓮主義に及んで熱論すること二時間拍手裡に四時半會を閉ぢた

千葉縣　房總の靈地は今や復活し來りて道を求むるの志念厚く布敎師の熱心なる傳道は著々成果を擧げつゝあり三上義徹師は二月九日九十九里海岸粟生野圓立寺に講演を開き人の內容に就て信仰に活きたるものが尊とき所以を懇切に說いて信仰を勸め十日北今泉等覺寺に於て青年の爲に修養の必要なる所以と日蓮上人の偉大を學ぶべき理義を說き示すこと二時間餘に亘り深き印象を與へた二十日下總長作夫婦梅の名ある長胤寺に於て講演を催し人智は進んでも自己を忘るゝの不用意を誡め神佛の鑑照を疑ふものは自己存在を否定するものなりと論明して反省と自信とを與へたので聽衆は日

蓮主義の雄有さを感じて唱題するものがあつた

東海道　二月一日太田妙安寺に少年及び青年修養會大會を開く堂內には會員全部の書書及び手工品の有らん限りを羅列して一般の縱覽に供し午後六時より講演を開く吉田師の開會の辭に次ぎ會員相互登壇して壇上の花を飾り更に幹部の講演及び本郷校長は青少年の品性修養に就て懇篤なる講演をなし餘興には大福引ありて午後十二時散會せりと云ふ尙吉田師は同月七日同村公會堂に於て上三原青年會の爲に至誠と奮鬪なる題下に一場の講演をなし多大の感動を與しとぞ二月二日午後七時吉美佐原伊平氏宅に養神會大會を開く聽衆二百青年及村內有力家及學校教員諸氏の講演に次ぎ藤本師は青年本領野中師は奮鬪主義吉田師は人生と幸福なる題下に懸河の辯を振ひ福引の餘興ありて午後十一時萬歲聲裡に閉會せりと云ふ二月六日午後七時顯正會例會を吉美妙立寺に開く聽衆は青年其過半數を占む藤本師の開會の辭に次ぎに野中師は日蓮主義吉田師は日本佛敎の大系高橋僧都は時代思潮より延て宗敎の尊敬すべき所以を說き聽衆の何れも多大の法益に浴ひしと云ふ

京都　二月一日二條妙滿寺に例月の國禱會を修し野老權僧正の法話あり同日午後七時本國寺內眞如院に於て例會を開催し金老師は開會を宣し御書拜讀は明淺憲敎師之を勤め靈魂論に就て松井行英師の講演ありたり二日夜西洞院蛸薬師本田金四氏宅に修養會を開き江見乾丈師は日蓮主義の輪廓を說き川崎英照師は修養の極致は宗敎に入らざるべからず宗敎的修養は日蓮主義に來らざれば徹底せずとて一時間半に亘る講演を爲せり二月九日午後七時西洞院北村氏宅に講演開催日蓮主義の修養に就て江見師の所說あり石井師處世の事感を述べ松井師の法華經とは何ぞやに就て人生の効果を論明せられたり二月十日午後一時川東本正寺に於て本正婦人會の例會を催し金光孝碩師現代の要する佛敎に就て懇切なる敎示を爲せりと云ふ同夜妙滿寺講堂にて京都學生日蓮研究會第三例會を開き川崎英照師法華經大意を述ぶ會するもの帝大及三高の學生二十八名十三日午後一時妙滿寺に宗祖報恩會を修し金光孝碩師天災に就て諸經に顯れたる聖文を引用して日蓮主義の態度を闡明せり十五日夜千本壽量寺に公開演說を開き江見乾丈師は日蓮主義者の卓越せる抱負と責任とを語り武田顯龍師は活ける佛陀と死せる衆生の關係を論じて法華經に顯はれたる本佛の實在を語り川崎英照師は如何にして現代を救ふべきかに就て現代の欠陷を指摘して日蓮主義の使命を說けり十七日夜三條石見如水氏宅に同志會例會を開き石井寬俊師法華經敎義の卓越せる所以を語り金光孝碩師時代の變遷と活ける佛敎に就て日蓮主義の主張を解說せり十八日夜妙滿

寺に例會を開き江見師人生生活の用意を述べ銀井師は經文に現れたる時に就ての文證を引用して聖人の主張を加へて現代の弊風を說く金光師は聖賢の意見を述べて更に其心に法華の明鏡を用ひて完全人格を作れと說けり二十二日夜妙滿寺講堂に學生研究會の第四例會を開き川崎英照師法華經大意の續講をなす二十五日午後一時妙滿寺に日什聖人の御正當會を修し終つて石井寬俊師及び金光孝碩師相承論に就ての說教あり同夜鐘紡會社南寄宿舍に於て修養會を催し川崎英照師出張一時間半に亘つて修養論の讀講を爲せり

大阪　生玉前町堂閣寺に於て二月二日午後七時日蓮研究會發會式を擧行す大阪新報記者稅務署員等來會す能仁一十師の講演あり各自法悅の裡に散會二日午後七時堂閣寺に開講報恩鷲田顯正師人生の要路能仁一十師經典の信仰に就て梶木日種師の妙化ありて法雨多かりしと云ふ十三日午後七時中寺町蓮成寺に開催十界互具鷲田顯正師向上の意義能仁一十師佛陀三論の妙化梶木日種師の熱心なる所談あり聽衆歡喜に充ちて信仰を發起したりと云ふ二十二日午後二時生玉前町堂閣寺に顯本婦人會を開催しつゝあるも未だ發展の機運に至らず能仁一十師及び信徒相馬市佐江女史外二三の人此れを嘆き發展策を講じつゝありと堺市妙滿寺に於て例月の日蓮主義講演會を二月二十日開く川崎英照師の眞に世を救ふの道と題する有益なる講演あり二十一日同寺に於て研究會を開き川崎英照師の橘香集行法篇の續講ありたりと云ふ

岡山　岡山に於ける日蓮主義勃興は正に天下を壓せんとするの形勢は夙に世人の知る處なるも能仁僧正中川文學士の近時の活躍は目覺しき限りなりと云ふ備前和氣本成寺に於ては原田日勇師の努力によりて婦人會及同信會の發展を計りつゝあるが本年一月和氣石川郡長より郡內に於ける精神修養上の講師を依囑せられ一月十日郡衙會議室に開ける各町村會に出席し郡長の挨拶に序て原田師は免囚事業に就て注意を促がし二月五日郡內各小學校長會場に於て視學の挨拶に序て原田師は不良國民防止策に就て講話を爲し二月十三日に開ける藤野村農會同小學校舍にて久鄕縣技師金藤郡農技師の林農業に就き講話ありたる後原田師は共同事業の幸福に對する意見を發表し結合の涵養を叫び十四日前記各辯士共に日笠村小學校に於て原田師は結合力の必要及効果を說き十五日豐田村小學校に於て統一の偉力に就て大に辯論を振ひ各地とも非常なる盛況にして精神の根底に一種の宗敎的靈火を點ずるものありしと云ふ

九州　二月七日午後七時久留米本泰寺に於て德敎正信會第五回例會を開く景慕に堪へざる日蓮上人新開清八予の聖日蓮觀(其二)中原道應來會者には高山第十八師團經理部長外約五十名皆

熱心に傾聽せしが兩三氏の質問應答あつて午後十時十分散會せり米城を距る南約六里此處は所謂山間避地の八女郡白木村宮ヶ原と云ふ肥後と筑後の國境の山又山を三方に控へて居る天晴れ氣淸らかな一日(二月十七日)柳川妙經寺檀家瀨谷富次郎氏宅にて法話會を試みたタッタ一軒の法華宗南無もへちまも知らないものと思ひの外其夜集ひ來る老若男女約三十名法華經と女性平岡本信精神修養中原道應の講演に餘程感ずる處がありしと見へ深更を忘れての隨喜話翌十八日午後三時半再び法莚を開く平岡師の前講に次ぎ人道と佛道中原道應約六十人の列坐の衆は約二時間半(二席)に亘る講演に確かに人道の眞義を解し又佛陀の慈悲に感じて落涙するものも少くなかつた十九日午後七時半酒井田大月梅太郎氏宅にて信後の活動中原道應の熱烈なる辯論ありて渴せる心靈界に法水を灑いだ

小笠原　一月二十六日商船學校練習船大成丸の寄港を機會とし船長小關三平氏を顯本敎會所信徒總代大沼源十郎氏宅に招聘し一席の講演を乞ひ小關氏は現實社界に處する信念の必要に就て日蓮主義の立場より聖訓を引證し來りて諄々として能く日蓮主義の信念を述べ聽衆をして信仰を增進せしひるものありたり尙敎會にては毎月三回法要を行ひ法話を催ふし堅實なる信仰を養ひつゝありと云ふ

長州　長州は維新の志士が傑出した地であるから思想問題には一等地を拔いて居らねばならぬ少なくとも思想の根本問題に注意を拂ふ樣にならねば長州の眞價がないことになる思想家まづ此の方面に留意して運動に努むるこそ肝要である萩町の朝倉布敎師は其天分を自覺して活動しつゝあるが二月四日萩町松本方に學生研究會を開き岩武了阿部鞆音氏の演說の後朝倉師は日蓮上人の動王主義を論明し十一日同會を催し見玉才三氏の青年の覺悟論あつて朝倉師の社會救治の根本策に就て宗敎の必要を述べ十二日妙蓮寺に開講朝倉師慈善と宗敎との關係を論じ十五日午後「四佛知見大橋師」同日夜「佛陀論大橋師」十六日午後「犯罪原因朝倉師」「日蓮上人格方面大橋師」同日夜「宗敎心の發動朝倉師」「迷信の弊害大橋師」十七日午後「女性觀大橋師」十八日夜三隅了性院に開催「女人成佛論大橋師」十九日午後同院にて「發菩提心朝倉師」「國民生活と信仰大橋師」同日夜「社會救治策朝倉師」「迷信と本尊大橋師」二十日午後「日蓮上人の人格大橋師」の熱心なる講說ありて多大の感動を與へたと云ふ

▲會津本山講趣意書

謹んで會津若松市別格本山妙法寺の由來を按ずるに今を距ること六百有餘年の昔此地に降誕し給へし顯本法華宗開祖　日什大聖師が七

十餘歳の老軀を厭はず經卷相承直授日蓮の法旗を鮮ひして公家の奏聞武家の諫爭と共に大に折伏弘通に努め立正安國の祖道漸く天下に明かに宗旨再興の事業正に緒に就きしを認め鄕里會津に歸り時の城主葦名侯の本願に依り明德二年一宇を創立す是れ我が寶塔山妙法寺なり玆に化を敷くこと一年餘にして入涅槃し給ふ實に當山の如きは大聖師誕生入滅の靈地として宗門隨一の名刹と謂ふべし是を以て明治維新の前後は宗門各地を通じて會津本山講と稱する參詣團體組織せられ年々歳々大聖師の靈蹟を參拜するもの踵々接したりしが明治元年會津鶴ヶ城陷落の際兵燹に罹り遠近に聞えし當山の大伽藍も一朝にして烏有に歸せり爾來四十餘年間團體參詣の跡を絶つの止むなきに至りしが明治四十一年以來宗門全體の助力に依り堂宇の再建に着手し大正元年十月竣功を告げ堂舍の壯大莊嚴の美殆ど舊觀に復することを得たり今やこを好機として更に全國各地に會津本山講を復舊し四方雲集の士女をして親しく當地に存在せる大聖師の御靈蹟を參拜せしめ六百年前に於ける敎風德光の偉績を追懷せしむると共に顯本正義の信仰を倍增し報本反始の美風を振起せんと欲す冀くば宗內僧俗諸氏奮て此淨業を贊助あらんことを

會津妙法寺貫主
大僧正　坂本　日桓

會津名蹟案內

一別格本山妙法寺、日什聖人御靈廟、日什聖人產湯清水、日什聖人釜窟、瀧澤八幡宮、飯盛山白虎隊會津鶴ヶ城、東山仙境溫泉、羽黑山東光寺、瀧澤不動瀧、役の行者の舊蹟等其他宇都宮驛より日光山迄九里汽車の便あり

（注意）東京上野驛より岩越線接續列車へ御乘車便利に候
仝上野驛より會津若松市迄二等乘車賃片道金參圓五拾九錢、三等乘車賃金貳圓貳拾九錢、十時間に着す

統一團翼賛員會費領收報告

金四圓五拾錢　二ノ三　馬塲哲次郎殿
金貳圓五拾錢　二ノ十二月迄　早川千吉郎殿
金壹圓也　同　木村十郎殿
金拾貳圓也　二ノ九　鄭永邦殿
金五圓也　二ノ十二月迄　久富久子殿
金五圓也　同　馬塲幸七殿
金五圓也　同　安田松慶殿
金五圓也　同　安藤直斯殿
金壹圓也　同　岸野鹹殿
金壹圓也　同　岩井庄三郎殿
金壹圓也　同　大野正一殿
金貳圓也　同　猪又金太郎殿
金貳圓也　同　戸村清次郎殿
金壹圓五拾錢　同　矢代太郎吉殿
金壹圓也　同　鹽谷時重殿
金五圓也　同　小關三平殿
金拾圓也　同　牧野賤男殿
金拾貳圓也　三年三月迄　小笠原丁殿
金參圓也　二年十二月迄　三上義徹殿
金六拾錢　同　三上禎子殿

金六拾錢　同　諸井竹治郎殿
金六拾錢　同　諸井美起殿
金六拾錢　同　諸井きく殿
金壹圓也　同　山本忠治殿
金五圓也　同　關田養叔殿
金壹圓也　同　關田もと殿
金六拾錢　三年三月迄　中西芳山殿
金壹圓三十錢　同　關根孝助殿
金四拾錢　二年十二月迄　加藤鋪次郎殿
金壹圓也　三年三月迄　安江清海殿
金貳圓五拾錢　二年十二月迄　小澤あい殿
金壹圓也　同　內田いし殿
金壹圓也　同　齋藤助藏殿
金壹圓也　同　齋藤さと殿
金九拾錢　三年三月迄　齋藤藤四郎殿
金參拾錢　二年十二月迄　渡邊源次郎殿
金參拾錢　同　渡邊壯一郎殿
金參拾錢　同　渡邊きん殿
金貳圓五拾錢同　伊丹よし殿
金貳圓五拾錢同　伊丹とめ殿
金五圓也　同　隅山狗一殿
金拾圓也　同　增田とめ殿
金貳圓五拾錢同　高野修道殿
金壹圓也　三年二月迄　勝屋勘之助殿
金四圓五拾錢　二年十二月迄　加藤八太郎殿
金四圓也　同　田中とめ殿
金壹圓也　同　宇田川繁次郎殿
金壹圓也　同　望月小太郎殿
金貳圓也　同　石濱英哉殿
金參圓五拾錢同　鈴木日雄殿
金壹圓七拾五錢同　鈴木もと殿
金貳拾四圓也　四年一月迄　安川末子殿
金拾貳圓也　同　安川滋子殿
金貳拾圓也　二年十二月迄　金澤殿
金貳圓五拾錢同　村田てる殿
金五圓也　同　吉田芳緒殿
金貳圓五拾錢同　田島義潤殿
金九拾錢　同　田島のぶ殿
金貳拾圓　同　岩戸清治郎殿
金七拾五錢　三年三月迄　井內德三郎殿
金六拾錢　三年三月迄　伊藤コキク殿
金參拾錢　三年一月迄　今井仙太郎殿
金壹圓五拾錢　二年十二月迄　中村乾信殿
金壹圓也　同　岩崎會眞殿
金壹圓也　同　永島山吉殿
金五圓也　同　飛舖恭平殿
金貳圓五拾錢　同　吉田純賀殿
金貳圓五拾錢同　栗原日灌殿
金貳圓五拾錢同　井上日冲殿
金貳圓五拾錢同　藤平法順殿
金四圓也　同　大川日敎殿
金貳圓廿五錢同　大津日文殿
金壹圓也　同　秋葉純一殿
金貳圓五拾錢同　石井寬俊殿
金五圓也　同　井口善叔殿
金貳圓五拾錢同　龜崎日憲殿
金壹圓也　同　龜崎いは殿
金貳圓五拾錢同　池澤暻玄殿
金貳圓五拾錢同　小高榮郁殿
金五圓也　同　平山由次郎殿
金貳圓五拾錢同　橫溝日藻殿
金壹圓也　同　猪野重之助殿
金五圓也　同　山本熊之助殿

金五圓也　同　前田　日應殿
金貳圓五拾錢同　因幡　善英殿
金壹圓也　同　笹本　春義殿
金拾圓也　同　渡邊　日研殿
金貳圓也　同　中田　量叔殿
金四拾錢　同　加藤　萬吉殿
金四拾錢　同　加藤庄五郎殿
金貳圓五拾錢同　吉塚　通榮殿
金壹圓也　同　有田　宏道殿
金五圓也　同　繁宮　久遠殿
金壹圓也　同　直井惣兵衛殿
金貳圓五拾錢同　山本　通辯殿
金貳圓五拾錢同　白井　日慶殿
金壹圓六拾錢同　朝倉　一乘殿
金參圓五拾錢同　吉田　堅晴殿
金貳圓五拾錢同　高橋　遵碩殿
金拾圓也　同　岡本　圓正殿
金壹圓也　同　佐々木英春殿

金五圓也　同　長谷川日濟殿
金貳圓五拾錢同　武藤　照惠殿
金貳圓五拾錢同　西山　日諭殿
金壹圓也　同　前田　圓整殿
金壹圓也　同　河邊　晉吉殿
金壹圓也　同　猪野　貞立殿
金五圓也　同　坪永　日登殿
金貳圓五拾錢同　金光　孝碩殿
金貳圓五拾錢同　川崎　英照殿
金貳圓五拾錢同　銀井　乾升殿
金壹圓也　同　髓口　孝道殿
金貳圓五拾錢同　大塚　會叔殿
金五圓也　同　高木　本順殿
金五圓也　同　原田　日勇殿
金壹圓也　同　紀野　俊耀殿
金壹圓也　同　柴原利平治殿
金壹圓也　同　深井守之助殿
金九拾錢　同　影山　謙二殿

金貳圓五拾錢同　桔梗　開章殿
金貳圓五拾錢同　出海　俊義殿
金壹圓六拾錢同　增田　聖道殿
金壹圓也　同　塹　智了殿
金壹圓也　同　田久保日城殿
金參圓也　同　竹内　無着殿
金壹圓也　同　梅澤　天純殿
金參圓也　同　森川　喜代殿
金九拾錢　同　大塚　靜殿
金貳圓也　同　萩原　啓門殿
金五拾錢　二年三月分大橋　日襲殿
金五圓也　二年十二月迄　岩佐　春治殿

▲翼賛員各位に虔告す

本團の趣旨を御賛同の上翼賛員に御加盟被降本團の事業に外護を與へらるゝ事感佩の至りに候本團は更に一層の努力を以て法國の爲に各種の運動を計策可致候就ては會費の儀精々御都合の上御喜捨被成候樣此際虔告仕り候也

統一團會計課
（振替一二一九番）

▲本誌購讀者に謹告

▲大正二年十二月までの購讀料未拂の各位は此際全部御拂込被下度候

▲前年迄の誌料御拂込無之候時は遺憾ながら發送見合せ可致既に前年度末集金郵便差出候へしに支拂拒絶の方も有之如何なる思召なるかは存じ候はねども雜誌經營上の都合も御推察有之樣切望仕り候

▲購讀料は可成前金に御拂込被下樣願度候

統一團雜誌部
（振替一二一九番）

大僧正　本多日生師講述

法華經壽量品講演集

郵税共金參拾五錢

▲壽量品は一代佛教の魂也、眞理の中柚也、哲學を語らんとするのは壽量品の深義を究めざる可らず、佛教上の佛陀の敬慕せんと欲せば壽量品の實在本佛に接せざる可らず、本書は本多大僧正の豐富なる學殖と卓越の識見によりて講述せられたるもの也、本書を讀破せば佛教の中心何れにあるかを知るを得る也、賣切れざる内に申込あれ

勤行作法

一部金五錢
郵税四部迄金二錢

▲日蓮主義の勃興に伴ふて修行に入るもの多きため購求者增加し、久しく賣切れ居りしが今回印行したり、本書は各教團統一の理想の下に編纂したるものなれば、勤請文回向文の如き簡潔にして要義を盡せり、總振假名付なれば初心の行者の修行に適す、殊に各會の信者用として適切也

統一團書籍部
（振替東京一二一九番）

◀緊——急——廣——告▶

▲混亂せる現代思想に最高指針を與ふるものは法華經也
▲法華經は健全なる第三文明を產み出すべき大なる力也
▲文明人は最高の思想に接觸するを要す。吾人は文明人にして法華經は最高の思想也。然らは則ち文明人たる吾人は本書を讀まざる可らず

法華經講義

文學博士　三宅雄次郎君序
大僧正　本多日生師著

特價金三圓
郵稅十六錢

▲文明人の誇りは財にあらず金にあらず。洗練せる思想と高潔なる人格を具ふるに在り。須らく第一の重寶として本書を備へよ
▲本書の再版將に賣切れんとす。此機を逸して千歲悔ゆる勿れ

發行所　東京淺草北清島町（振替東京一二一九）　統一團（電話下谷六千三百十番）

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉强仕各宗の佛具一切陳列仕置候

正價附
三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども一切の種類は左の通り
●佛具●佛具●金物●一切●鈴●木魚●一切●蠟燭●理趣分●佛具●一切●過去帳●木製●香炉●珠数●大傘●了中啓●雪洞●釣鐘●半鐘●大鼓●人天蓋●大扇●鐵鬼●輪●屋根●木像●子●木魚●人●唐輪●梁●施●平椅●機●盤●鐘●鹿鳴●水●高●裝●砂●茶●菓子●行●鉢●量器●白●正價附にして

小包條例附（郵券四錢）
此の種類品有之候へ共一々記載する能はず。依て特に佛具目錄を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送附被下候はゞ遅滯無仕候。此の目錄を御覽あれば。寺院樣方の御入用の品は安價にて買物出來る。早く取よせ御覽あれ。其の正價附の品は

●佛具卸部　京都市三條通小橋西入　本師　三法堂藤田總次
特電話二千七百八拾三番　振替貯金番號　大阪一四二五九　東京一二〇七一

●小賣部　同市三條通大橋西入　三法堂佛具陳列場

大僧正本多日生師編

橘香集

本書は法華經の要文と日蓮上人の遺文中より警句教訓を抄錄したるものにして內容に於て發心教相佛陀人身法界本尊行法得益警策の諸篇に分類して研究引文を要する場合は尤も至便にして日蓮主義鑽仰者の供ふべき珍書也

本製皮金文字入美本　金六拾錢
上製賣切れたり
並製　金拾錢
郵稅　貳錢

毎月一回十五日發行、一部金六錢　郵稅五厘　一ケ年金七拾八錢　代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ此場合ニハ誌料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正三年三月十五日印刷發行

發行人　井村日成　編輯人　山根日東　印刷人　鈴木日堆

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團（電話下谷六千三百十番）

（第二百二十九號）
明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
大正三年三月十五日發行（毎月十五日）

●將に賣切れんとす●

▲殘本數十部あるのみこの機を失して千歲悔ゆる勿れ

內容

▲本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるものにして、日蓮主義が眞理批判の上に如何なる地位に在るか、又現代思想界革正の上に如何に大なる權威あるかは、六百餘頁に亘る金玉の文字の中に潜めり。

天晴會講演錄（第貳輯）

豐富

▲講演者は、本多大僧正、井上中佐、小笠原大佐、五島子爵、小林文學士、姉崎文學博士、高島平三郎先生、辻文學博士、松森僧正、柴田一能先生、竹內久一先生、田中智學先生、林陸軍中將其他の名士也▲

▲價格——一部金貳圓。郵稅金拾貳錢とす

▲送金——東京淺草北淸島町三上義徹宛（爲替）の事

▲求道者の座右に本書なければ恥也本書は其人の品格をかざるもの也

◀不滅の生命と精神生活の活力はこの書に在り▶

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正三年四月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第二百三十號

統一

日本帝國の天職と日本民族　海軍少將　佐藤鐵太郎

偉大なる哉日蓮上人　法學士　小西眞雄

新思想に對する吾人の態度　三上義徹

開結二經の研究（四）　井村日咸

學習院參觀の記　記者

▲北海道巡教▲各地教報